



▲ 祭神加藤清正の神像

## 空知集治監と移民

近代専門部会

猪 飼 隆 明

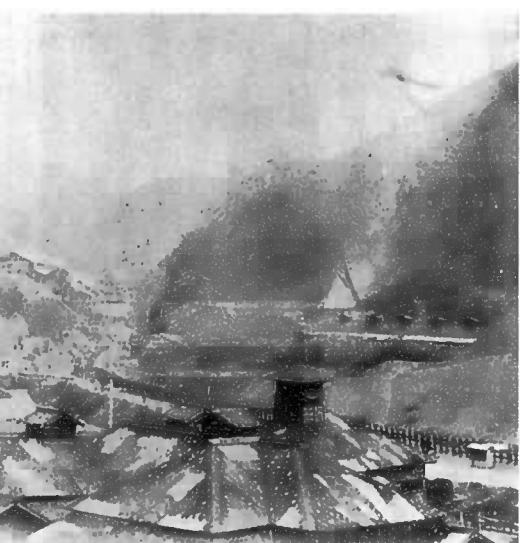
北海道由仁町は熊本部落の神社＝熊本神社の祭礼の日は九月一日であった。部落の人との約束が意外に早く実現して、祭神加藤清正の神像の故郷本妙寺の住職池上尊義氏と私

今にては右の内、歌臼内炭山または遊樂部鉱山等へ出稼ぎし居るもの二五〇人計りあり、また当時幾春別炭山の坑業に従事するもの二〇〇人以上、その他は伐木運搬等を為し居れり。生計の程度は貧八分、中二分（是れは独立生活の見込あるもの）にて熊本移民の方は良しく阿波移民は最下等のもの多く、稼人は移民の外に目下二〇〇余人もあり」とあつた。目を見張る記述である。ただ数字は熊本県と阿波国は逆だと訂正されている。それでも二〇〇人の移住は大規模であり、明治二二年というのは時期も早い。ともかく幾春別に行かなければならぬ。

岩見沢から先はバスである。空地集治監に移監された囚人の最初の仕事はこの岩見沢から幌内までの鉄道建設であった。一八八二年一二月には鉄道が開通したというからいかにすさまじい強制労働が行われたか想像がつくだろう。その後一八八八（明治二二）年に幾春別まで鉄道は延びた。その鉄道も相次ぐ炭鉱の閉山によって、今は取り外されどこまでも真つすぐな道路にとつてかわられていた。

もちろんこれもその殆どが集治監道路と呼ばれている。バスは終点に近づくにつれ、かつて炭住が軒を連ねていただろうと思わせる住宅地と幾春別川の渓谷の間を走った。終点を

掘しておられる人がいた。『北門鎖鑰の礎石渡辺惟精』や『三笠郷土誌雑記』などの著書をもつ供野外吉氏であるが、既に故人である。博物館は、佐々木武氏の名を教えてくれた。岩見沢のお宅に電話を入れ、種々教えを乞うた。「ともかく来い、そして泊まつて行け」という。



▲ 空知集治監幌内外役所

さらに少しのぼった所に、三笠市立博物館はあった。博物館には、坑内で使用された道具類や集治監典獄渡辺惟精の日記の原本など興味深い史料があつたが、移民に関する史料は皆無であった。

やむなく、バスで折り返して集治監のあつた市来知で下車、集治監の跡を足を棒にして歩き回った。遺物は、わずかに典獄の官舎の暖炉に接続されていた煉瓦の煙突のみであった。かつてこのあたりを歩き回って歴史を発

掘しておられる人がいた。『北門鎖鑰の礎石渡辺惟精』や『三笠郷土誌雑記』などの著書をもつ供野外吉氏であるが、既に故人である。博物館は、佐々木武氏の名を教えてくれた。岩見沢のお宅に電話を入れ、種々教えを乞うた。「ともかく来い、そして泊まつて行け」という。

北海道の炭鉱には友子会または友子同盟と呼ばれる坑夫の集団組織があった。これは坑夫間の相互扶助（労働災害等の場合）と親睦、あるいは坑夫の技術向上を図るために設けられたものである。友子は親分（先山）と子分（後山）の関係で成り立つが、子分として友子に同盟するには、三年三ヶ月と一〇日の坑夫としての修行が必要で、修行を終えた後先輩友子連中の立ち会いのもとで、親分・子分の盃を交わす「取立の儀式」が行われる。この席上で親分・子分連印の「取立免状」が交付され、初めて一人前の坑夫として友子の仲間入りが認められるのだという。友子は毎月一定額の会費を納め、また仲間が事故や怪我をした場合、家族に不幸があつたときなど会費とは別に一定の金銭・部品を出し合うのである。こうして相互扶助が行われるのであるが、こんな約束事があつた。親分が事故その他で死亡したとき、子分は一周忌までに墓を

建てなければならないのである。子分の名で、あるいは取立兄弟分・舍弟の名で建てられた墓があちこちに残されている。佐々木氏らはこれを丹念に調べておられた。彼のファイルには、「熊本県之産 堀川巳之助」らが建てた「秋元直之墓」、「舍弟 肥後国出生 岡村末松」らが建てた「豊前国宇佐郡山本村住人佐々木彦一之墓」などの写真が収められていた。「早乙女栄太郎之墓」を建てた「熊本出生 松尾健太郎」は、やがて松尾組を率いる親分になつたが、佐々木氏は戦後彼に会つたことがあるという。熊本出身者は、熊本部落をつくり、怪我などによつて炭鉱で働き続けられない人たちを離れて川岸のじめじめして設備も古い。早急に改築を考えるべきではないか」とただしたのに対し、市長は「改築は一〇数年来の懸案であり、改築するとすれば、市民病院の二期工事の具体的計画化のなかで、院内に感染症病棟を造ることが望ましい」旨を答えて、これが翌日（一二月七日、熊日）の新聞報道となつた。

隔離病舎の設置、管理は伝染病予防法に基づく施設。伝染病の隔離は地方自治法が冒頭に示している自治体事務である。伝染病の恐怖が次第に忘れかけていく時代とはいえ、発生初期の適切な防疫、早期の治療には、対応できる施設、設備が欠かせない。老朽化を指



## 近代的感染症棟の併設

現代専門部会

吉原亀久雄

大江六丁目にあつた伝染病院の市立白川病院を、湖東一丁目の市立熊本市民病院に統合する構想を熊本市が初めて発表したのは、昭和五四年（一九七九）の一月定例市議会であつた。当時、星子敏雄市長が一般質問で答弁している。質問が「現在の（白川病院の）建物は三一年（一九五六）に建ち、老朽化して設備も古い。早急に改築を考えるべきではないか」とただしたのに対し、市長は「改築は近隣（南部）一市七町、五三年には更に北部の一市四町一村の、それぞれ伝染病患者の診療委託を受けたりしながら、病院の補修工事は続けていた。そうしたなかで、白川病院六〇床を四〇床に減床して市民病院に統合し、跡地には市立図書館を建設する計画が動き出して行つたわけだが、その第二期工事を進める市民病院は、周囲の市民たちの反対運動が生まれてきて苦労している。

当時、伝染病院は隔離施設、一般病床を備える病院からは切り離すのが常識だつたし、その「白川病院」が市民病院に統合して移転してくるとあって、伝染病院アクセスに周囲が反対の声を高めたのは当然であった。時代を遡れば、熊本市が赤痢・疫痢の多発都市

年（一九七〇）に中止していたし、二年後の四七年には市民病院に統合する基本計画を打ち出していたのである。そして、五五年七月に、市民病院の第二期工事研究会が出来、その統合計画案作成に着手している。

現在地改築を中止して以来一〇年間、当の伝染病院は老朽施設のまま放置されていたわけではなかつた。五〇年（一九七五）には腸チフスが多発し、患者二〇人を収容。同年からは近隣（南部）一市七町、五三年には更に北部の一市四町一村の、それぞれ伝染病患者の診療委託を受けたりしながら、病院の補修工事は続けていた。そうしたなかで、白川病院六〇床を四〇床に減床して市民病院に統合し、跡地には市立図書館を建設する計画が動き出して行つたわけだが、その第二期工事を進める市民病院は、周囲の市民たちの反対運動が生まれてきて苦労している。

当時、伝染病院は隔離施設、一般病床を備

として県内外の恐怖的注目をあびていたころ、昭和二六年（一九五二）六月の臨時市議会では、白川病院の地元、大江町一帯から「白川病院移転に関する請願」が出されている。市議会は次回へ継続審議して、この請願を「不採択」としたが、周りの市民たちの訴えは「市立白川病院は戦災を受け、旧兵舎利用の間に合わせの仮設だから、適地を選んで移転してもらいたい。附近には大江小、江原中、九州学院等が接近しており民家も多く、地元民は迷惑している」というものであった。隔離機能への不安、そして伝染病予防上の警戒心が三〇年後も、今度は湖東界隈で高まつたのである。

その反対運動に対しても、市民病院側は、医療現場の幹部たちが周辺の団体等を説得して回った。

—これから伝染病診療は、ただ隔離さえしておけばよいという医療ではありません。手術をする患者が隔離病棟に発生したときはどうするか、その点、総合病院に併設して収容して置けば、効率的な治療が出来る。また、たとえば、日本脳炎の患者の措置には、麻酔科や耳鼻科の協力も必要です。隣県の福岡市では、新設の「こども専門病院」に併設したではありませんか。—

も「—伝染病棟の併設は、そうした医療スタッフや設備を有効に活用しようというのにほかならない」と、市民病院併設は効率的で望ましいと取り上げた。こうしたジャーナリズムを背景に、市民病院側の説得活動も周辺市民に次第に浸透していくのである。

昭和五九年（一九八四）に至り、白川病院六〇床は、熊本市民病院（一般五四〇床）併設の伝染病床四〇床に生まれ変わった。つまり北館の最上階棟（七病棟）感染症科の時代に移ったのである。周辺は勿論、全市を納得させた一つは設備の近代化であった。一定の階層に収容して、実質的に隔離するだけでなく、空気調節で病室ごとに完全隔離ができること、室内の空気は焼却滅菌して排出するシステムなど、いわゆる空気消毒まで気配りしての汚染防止を確保しており、同時に、伝染病に対応する総合医療体系ができたことになる。つまり「通常の医療スタッフが、通常の処置を利用して、区別なく積極的に治療することが可能になった」と、熊本市民病院では言っている。総合病院併設は全国的に数少ないそうで、その点、熊本市は先進都市となつた。

新聞の社説（熊日＝昭和五四年一〇月五日）も「—伝染病棟の併設は、そうした医療スタッフや設備を有効に活用しようというのにほかならない」と、市民病院併設は効率的で望ましいと取り上げた。こうしたジャーナリズムを背景に、市民病院側の説得活動も周辺市民に次第に浸透していくのである。

これが年間収容数の推移である。（引用史料）「白川病院史」「熊本市民病院・病院事業概要」、他に聞き取り史料等）

八九六）。昭和初期の爆発的腸チフスの大流行期で、一時、二八四床に増強した隔離病舎も、四〇床時代の今は、入院患者数もガタ減りだ。ちなみに平成七年度は赤痢八人、日本脳炎一人、計九人。同八年度では赤痢二人、日本脳炎一人、アメーバ赤痢一人、細菌性赤痢一人、計五人。（以上契約市町村も含む）

料）「白川病院史」「熊本市民病院・病院事業概要」、他に聞き取り史料等）



## 戦前の熊本の歌あれこれ

瑞鷹酒造株式会社 専務取締役

吉村圭四郎

少し前のことだが、山崎貞士先生のお宅にお伺いすると先生は「実にいいのがでましたね」とおっしゃって新熊本市史別編第一巻の古地図を開いて拡大鏡を片手に城下の武家屋敷の一軒一軒に詳細な解説をなされた。九十歳を越える先生の記憶力とご健気に感じ入るとともに、狭い我が家ではあの地図の巻の大きく重い体裁は家族からいたく懇意ひんしゆくを買っていたが、なるほどこれだけの大きさが必要だったのかと改めて感心したりした。

市史で面白いのは史料編第九巻「新聞・上」である。読むほどに当時の世相が浮かび上がってきて興味がつきない。中でも目を引いたのは昭和四年に水前寺で新聞社の主催により開催されたレコードコンサートの記事で、プログラムの中に二村定一、佐藤千夜子といった有名歌手に交じつて梅若の名が出ていることである。(市史史料編第九巻七五六ページ)

梅若の本名は向山うめさんといい小倉の券番で美声の持ち主であったが、作曲家の藤井

清水氏がその声を聞いて、氏の薦めで二回ほど上京し吹込んで、昭和四年にピクターから数枚のレコードが出ている。それがさつそくお座敷とは勝手が違います。調子が出なかつたと本人は述懐している。お座敷で披露されているのである。

レコードの吹込みはお座敷とは勝手が違います。向山嬢は昭和六年、プロの歌手を目指し意を決して上京、のち赤坂小梅の名でデビューして九州民謡を得意とする人気歌手になる。

明治末から大正期にかけてのアコースティック吹込み(ラッパ式吹込みともいう)は声の空気振動で直接カッターを切るので、よほど大きな、ほとんど怒鳴るような声で歌わないと録音ができなかつた。したがつて相当声量のあるクラシック系の歌手以外は音程の外れた下手な歌に聞こえてしまうのであつた。

「鹿児島おはら節」がその代表で、のちの土の香りのする民謡と違つて、言わばお座敷民謡である。熊本でも「田原坂」の歌が幾つか吹込まれている。

「田原坂」のレコードで最も古いと思われるものは昭和五年七月頃の発売と推定される日東盤四〇四八だが、この盤のレーベルは「熊本／唄・留吉／糸・朝菊」となつてゐる。歌つてゐる留吉姐さんは明治の頃この歌の作曲者として名が挙がつてゐる人で、もしそうならばこの盤の節廻しこそ正真正銘の「正調田原坂」を今日に伝えるものということになる。この盤の節は今日歌われてゐる二上りのやや歌謡曲風メロディと殆ど同じだが、リズムは甚句調の和拍子である。

盤)が世に出ることになつた。昭和初期には全国各地の民謡が盛んにレコードに吹込まれ大流行した。「佐渡おけさ」や「田原坂」は全国で大流行した。昭和初期に最も続々と進出し、毎月新譜が各社から発表され、次々と新しいレコード(世にいうSP



日東レコード「田原坂」

ビクターレコード「火の国小唄」



この盤の聞き取りによる歌詞は三番が

右手に血刀、ゆん手に生首

馬上豊かに、ア、美少年

となつていてちょっとドキッとしてしまう。

これが本來の歌詞であつたのだろうか。

この時代は一方で民謡調流行歌（新民謡と

もいわれるが大正期に始まつた新民謡運動の

歌と紛らわしいのでこう呼ぶことにする）が

盛んに作られた。詩人の西條八十氏が作詞し

中山晋平氏が作曲するというコンビが有名で、

全国各地の音頭や小唄が次々とできた。その

中に「沖の不知火流れて消えてヨ…」という

「火の国小唄」がある。もっともこの歌は九

州新聞社が募集し、阿蘇郡宮地小学校訓導の

山口白陽氏の応募による入選歌詞で、西條氏

の撰、補作にならなものであつた。

「火の国小唄」

はA面が藤本二三吉嬢、B

面は三島一声

氏というこの時代の黄金歌

手の歌唱によ

り昭和六年十月新譜でビクターから発売され  
ている。

## 日誌抄

1997年（平成9年）後半

- 7・2 原始・古代史料調査（通史編「自然・原始・古代」の年表原稿の調整）

- 7・4 近代史料調査（通史3巻の章立て）

- 7・6 近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の編集）

- 7・10 自然史料調査（動植物）資料集（動植物目録打ち合わせ）

- 7・12～13 近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の編集）

- 7・18 第51回部会長会議（部会間の調整）

- 7・26～27 近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の編集）

- 7・28 現代史料調査（通史編「現代Ⅱ」の章立て）

- 7・29～8・1 近世史料調査（原本照合）

- 7・30 中世史料調査（通史編「中世」執筆内容の検討、

- 清水山室地区・旧北部町巡査）

- 8・3 中世史料調査（清水山室地区周辺地頭館跡等巡査）

- 8・4～6 近代出張調査（神奈川県足柄下郡、戸田村、下田市、横浜市、東京都）

- 8・5～8 新熊本市史編纂委員会視察研修（広島県郡山城跡・小倉山城跡、島根県・銅鐸出土土地・銅劍出土地・月山富田城跡・島根県立博物館・八雲立つ風土記の丘資料館）

- 8・21 原始・古代史料調査（通史編「自然・原始・古代」の原稿内容検討）

- 8・25～29 近世史料調査（史料の検索と原本照合）

- 8・26 第54回近代専門部会（史料編「近代Ⅱ」編集刊行関連）

## 市史編さんだより

突貨車を身を持って転覆させ、壮烈な戦死をしたことが大きな話題となつた。

熊本県教育会が募集した荒木大尉顯彰歌に当選したのは九州日日新聞の県政記者で、のちの熊日に社長となつた島田四郎氏であつた。『潮風ほゆる北満の…』という「荒木大尉の歌」は人吉高女で教鞭を執つていた音楽家、球溪・犬童信藏氏により歌いやすい明快な曲がつけられて昭和八年三月十日の陸軍記念日に発表されている。

また熊本第六師団は昭和七年十二月に動員され熱河作戦に従事するが、昭和八年四月に九州・九日両新聞社の主催で「第六師団行進曲」が募集された。三千五百余の応募の中から当選したのはまたも山口白陽氏であつた。陸軍戸山学校軍楽隊へ作曲を依頼し、同隊の吹込みによるレコードは日東盤で発売された。

十月中旬郷土に凱旋した将兵は出征中に完成した「銀杏城の明け暮れに…」というこの歌で迎えられ感激の涙を浮かべたといふ。

ところでこの当時のこれら熊本での募集歌の選者は多くは第五高等学校教授の八波則吉氏であつた。八波氏は福岡県の出身で、五高から東京帝大國文科卒、四高教授、文部省督学官を経て五高教授となり、昭和十五年に退官して五高名譽教授となつた人である。明治

の「尋常小学国語読本」の編纂に携わり作文指導の著書も多く、「少年俱樂部」に小説や詩も書いていた。唱歌、校歌の作詞でも第一人者で昭和六年に出版された「唱歌の作り方」では自ら熊本で作った多数の学校の校歌を実例に挙げている。

この頃、流行歌の世界では大村能章氏が作曲家として人気を博してくる。熊本市の平野雅曠氏の作詞に大村氏の作曲になる「天草小唄」は今でもよく歌われている。「波に揺られて不知火消えりや…」というこの曲はコロムビア盤昭和八年十二月新譜で発売されている。この盤は天草の亀浦（現牛深市）出身で薄幸の天才歌手、横田良一（本名・中道実穂）氏の絶唱盤もある。この盤を聞くたびにキン・コン・カンという教会風の鐘の音が始まるのは誰のアイデアだろうかと思うのである。

大村氏は山口県生まれ、海軍軍楽隊の出身で軍楽隊時代から和洋合奏を手掛けていたが、退役後作曲家としての下積時代には映画館で伴奏のかたわら譜面を書いていたといふ。活動写真のチャンバラ場面等で演奏するため長唄三味線の三弦譜を洋楽の五線譜に写して編曲するという仕事をしていたのが、日本調流大村氏はのちに「旅笠道中」や「三輪の桜

8 · 28	中世史料調査（通史編「中世」執筆に関する事例検討）
9 · 1	近世史料調査（史料の検索と原本照合）
9 · 2	現代史料調査（通史編「現代Ⅱ」の章立て）
9 · 3	近代史料調査（仙台市、青森市）
9 · 3 · 5	現代出張調査（仙台市、青森市）
9 · 4	近代史料調査（熊本第一高校・学校日誌、県公報等の調査）
9 · 5	近代史料調査（森下功宅・明治期の古書等の調査）
9 · 8 · 13	近代出張調査（北海道道庁史料館、夕張郡由仁村熊本部落）
9 · 13	近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の編集）
9 · 17	現代史料調査（通史編「現代Ⅱ」の章立て）
9 · 19	原始 古代史料調査（通史編「自然・原始・古代」の原稿にかかる事例検討、今後のスケジュール）
9 · 22	第37回中世専門部会（執筆にかかる事例検討、今後のスケジュール）
9 · 24	近代聞き取り調査（産業・経済、消防などの田尻武男氏よりの聞き取り）
9 · 27	自然史料調査（通史編「自然・原始・古代」の水分野原稿（図・表）の調整）
9 · 29	近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の編集）
10 · 7	近代史料調査（山口登志夫宅明治古書等の調査）
10 · 10	自然史料調査（通史編「自然・原始・古代」の図面原稿打ち合わせ）
10 · 14	近代史料調査（市史刊行年次計画、史料編「近代Ⅱ」の収録史料）
10 · 11	中世史料調査（中世山城予備調査：河内町岳）

コロンビアレコード「肥後五十四万石」



(替歌同期の  
桜となる)」

を始め日本調  
流行歌 の

大ヒット曲を

次々と作るが、

熊本でも「肥

後五十四万石」

の曲がある。

「五十四万石、

細川様は…」とい

う民謡詩の大

家、野口雨情

氏の詞になる歌はコロムビア盤昭和十年一月

新譜で発売された。

藤本二三吉嬢の歌うこの面に対し裏面は伊

藤久男氏の歌唱による「火の国育ち」という歌である。この盤の両面を聞いて熊本の人ならすぐにわかると思うが、「火の国育ち」が

「おてもやん」をアレンジしているのに對し

て「肥後五十四万石」は「キンキラキン」が下敷きになつていて、「肥後五十四万石」は佳曲ながら途中和風の転調があつて結構歌い

づらい点もあるのだが、これは正に「キンキラキン」から来ている。更に大村氏はこのあと「野崎参りは屋形舟で参ろ…」という東海林太郎氏の歌唱で空前の大ヒットとなつた「野崎小唄」をボリドールから十月に発表し

日東レコード「新興熊本大博覧会会歌」



ているが、このメロディは明らかに「肥後五十四万石」が下敷きになつてているのである。

「…ことは「キンキラキン」→「野崎小唄」

という流れになるのである。

昭和十年三月に新興熊本大博覧会が熊本市の水前寺を会場に開催された。その記念会歌

が募集され八波則吉氏の選により八代郡野津

村の住職・峰映之助氏の歌詞が当選した。熊

本県師範学校の音楽教師、清田竹男氏が作曲

し、同じく応募当選した「新興熊本小唄」と

表裏にして日東盤が発売されている。この会

歌は当時日東レコードで音楽監督をしていた

服部良一氏が編曲を手掛けている。服部氏は

翌年移籍してコロムビアの専属となり、のち

に「別れのブルース」を始め一世を風靡する

作曲家になるが日東時代はまだ無名の音楽家

であった。

熊本の歌の

多くが日東レ

コードで作ら

れているのは

この会社が大

阪にあり、他

の東京の会社

よりも熊本に地の利があつ

10 15 自然史料調査(通史編「自然・原始・古代」の植生図色選定)

10 18 近世史料調査(史料編「近世Ⅲ」の編集)

10 18 中世史料調査(中世山城調査・河内町岳)

10 20 中世史料調査(通史編「中世」執筆内容の検討)

10 22 現代史料調査(市内施設見学)

10 23 第45回原始・古代専門部会(通史編「自然・原

始・古代」の原稿方針)

10 28 近代史料調査(後藤是山記念館)

11 5 近代史料調査(JR九州北九州本社)

11 6 近代史料調査(市史刊行年次計画、史料編「近

代Ⅱ」の収録史料)

11 9 近代史料調査(史料編「近世Ⅲ」の校正)

11 14 近代史料調査(国会図書館、国立史料館、

国立文書館)

第23回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全

国大会出席(高松市)

11 12 14 近代史料調査(立正大学図書館)

11 15 16 中世史料調査(中世城調査・河内町東門寺)

11 17 中世史料調査(通史編「中世」執筆内容の検討)

11 18 第53回部会長会議(平成9年度事業経過報告、

市史刊行年次計画の変更)

11 19 第46回原始・古代専門部会(通史編「自然・原

始・古代」の原稿方針)

11 22 近代史料調査(史料編「近世Ⅲ」の校正)

11 23 24 中世史料調査(中世城調査・河内町東門寺)

11 25 第48回現代専門部会(通史編「現代Ⅱ」の編集)

11 26 第21回新熊本市史編纂委員会(平成9年度事業

経過報告、市史刊行年次計画の変更)

11 27 近世史料調査(史料編「近世Ⅲ」の校正)

5 30 近世史料調査(史料編「近世Ⅲ」の校正)

第55回近代専門部会(通史編の編集・刊行関連)

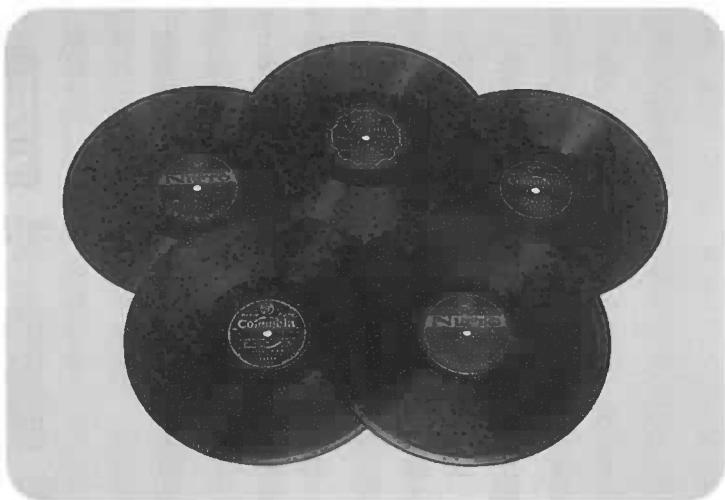
コロンビアレコード「色は黒いが」



歌われた。しかし北支、中支からさらに南方へと転戦し、第六師団はついに凱旋することなく終わってしまったのであった。

たからである。日中が全面戦争となつて昭和十三年七月、事変一周年を記念して九州新聞社は郷土部隊に新たな歌を贈ることになつた。今回は初めから山口白陽氏に作詞を依頼した。山口氏は「無敵師団進軍譜」と「色は黒いが」の二つの詞を作り、これに地元の音楽家・金掘伸夫氏が前者に軍歌調の曲を、後者には「露營の歌」に似たやや歌謡曲風の曲を付した。両曲を表裏に配したレコードは九月新譜でコロムビアから発売された。

短調音階による「色は黒いが血は赤い、九州育ちの粒揃い…」という「色は黒いが」は、霧島昇氏と二葉あき子嬢という当代一流の人気歌手に依つたことも相まって人気があつた。特に各章の最後が「あ、日本一の六師団！」で終わるところが印象的な歌で一般にも広く



## 加藤清正使用の黒印判

### 「履道應乾」について

近世専門部会

森 山 恒 雄

この「履道應乾」

の印判は、加藤清

正が慶長四年末

(一五九九年 清

正は當時三八才)



図(1) 下川文書

から、彼が死亡し  
た慶長一六年(一

六一一年)六月二四日まで常用的に愛用した  
印判である。彼のこの頃以降の印判では、

「履」二字を刻んだ印判を稀には使用してい  
るが、多くはこの文字を刻印した印判を領内  
向けに多用している。従つて清正の人間性を  
象徴する印判といえるものである。

「履道應乾」の印判文の意味するものは、  
正しい道に則つてふみ行い、天の命に従つて  
行動するという意味である。清正が当時修得  
した人世觀を示す内容と思われるが、この字  
句を何から誰から学び修得したかという点に  
ついては明確でない。清正は武術だけでなく、  
儒学者江村専斎を抱えて論語・詩經を学び研

鑽した。また慶長四年頃から関白近衛信尹や  
学士舟橋秀賢らと交友関係があり、また茶道  
にも心懸け、茶道師匠宗凡や道巴らとも交わっ  
ていることから推定すると、彼自身が中国の  
儒書の易經・詩經や前述の高名学者らからも  
教示を得て自ら成文化した文句であろうと  
考えられる。



図(2) 下川文書



図(3) 下川文書

この印判だけで清正が発給したことが明白で  
あるほどに使用したのである。なおこの黒印  
判を使用した文書を参考のため、文書(1)(2)を  
掲示しておこう。



図(4) 中沢文書

では何故に清正がこの印判を使用すること  
となつたかという点については、彼が慶長四  
年未から置かれた政治的背景をなお検討すべ  
きであろうが、その一つの理由は、彼が政治  
生命をかけた朝鮮出兵問題が主君豊臣秀吉の  
死亡にて頓挫したこと、しかもこの出兵問題  
をきっかけとして豊臣政権の中核部の石田三  
成・増田長盛・小西行長らから疎外され、豊  
臣子飼い大名としての地位を不安にさせたの  
みならず、徳川家康らの後援を受ける立場に  
至り、ついには秀吉の子豊臣秀頼に弓を引き、  
家康の東軍に参戦するはめに至るという政治  
的背景をもとに、彼の人生觀を大きく転換・  
変貌せざるをえなかつたこと、さらに彼の以  
後の political 的方向が領内の安定化と領土開発、

そして徳川政権下に服属するという政治的地位の変転という問題が「履道應乾」の文句を長期的に表象したと推定される。しかも印判と同時期であることは、この印判に秘められた彼の人生観・政治観が象徴されているようと思われる。

〔履道應乾〕印判使用の文書

(1) 加藤清正書状（折紙）

大阪城天守閣所蔵文書

為端午之祝儀

使者指越、帷式

到来、令祝着候、

將又、駿府・江戸

御前仕合能、至

伏見上着候間、近日

可令下国候、尚蠶江

主膳可申候也、謹言

(2) 加藤清正知行宛行状

名古屋市秀吉清正記念館所蔵

宛行所領之事、

玉名郡千田村之内を  
以千石、宮村之内

百五十四石、都合

千百五拾四石遣之候、

全令所務可

抽忠節之状、如件

慶長十四年

九月廿九日 清正

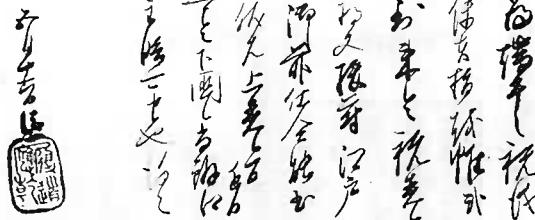


吉村橋左衛門尉とのへ

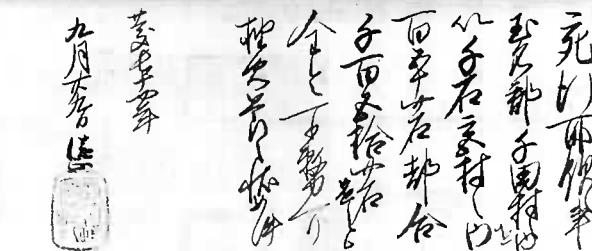
石川小弁とのへ

(意味) 家臣吉村橋左衛門に、端午の節句の御祝に帷子一着を戴いた御札を伝えるとともに、駿府の徳川家康と江戸の将軍徳川秀忠への御目見も無事終わって、京都伏見に無事に到着した。そして近日に下国する予定であること、以後の詳細は重臣の蟹江主膳に伝えておくので、主膳から伝達があるという内容である。発信した時期は明確にしえないが慶長十二、三年頃と思われる。

(意味) 加藤清正が家臣石川小弁に領地として、玉名郡千田村千石、富村一五〇石、計一五四石の知行地を遺わした宛行状である。発信は慶長十四年（一六〇九）である。このように家臣への領地宛行目録には「履道應乾」の印判状を非常に多用している。執筆は祐筆と思われるが、押印は清正自身が確認して押させたと思われる。



(1) 加藤清正書状



(2) 加藤清正知行宛行状

# 新熊本市史 刊行年次計画

第21回編纂委員会において  
下記のとおりに変更されました。

書名		発刊年度
通史編	第1巻 自然・原始・古代	※ 9
	第2巻 中世	※ 9
	第3巻 近世Ⅰ	12
	第4巻 近世Ⅱ	14
	第5巻 近代Ⅰ	12
	第6巻 近代Ⅱ	12
	第7巻 近代Ⅲ	14
	第8巻 現代Ⅰ	発売中(4,300円)
	第9巻 現代Ⅱ	11
史料編	第1巻 考古資料	発売中(5,700円)
	第2巻 古代・中世	発売中(3,700円)
	第3巻 近世Ⅰ	発売中(3,700円)
	第4巻 近世Ⅱ	発売中(4,800円)
	第5巻 近世Ⅲ	※ 9
	第6巻 近代Ⅰ	発売中'4,800円)
	第7巻 近代Ⅱ	10
	第8巻 現代	発売中(3,700円)
	第9巻 新聞 上 近代	発売中(3,700円)
別編	第1巻 新聞 下 現代	発売中(3,700円)
	第1巻 絵図・地図	発売中(10,300円)
	第2巻 民俗・文化財	発売中(5,300円)
	第3巻 年表・索引	14

※近日発売予定

(市内主要書店で販売、価格は今年3月現在)

◎ 史料調査に御協力いただいた方々  
(7月～12月)

古閑孝（蓮台寺）	白川小学校	北海道立文書館
上野信一（松尾町）	二岡中学校	防衛研究所
中野弘（江津）	新幼稚園	九州旅客鉄道（株）
木村秀雄（田迎町）	済生会熊本病院	九州旅客鉄道（株）
西田勇（田迎町）	熊本県立図書館	九州旅客鉄道（株）
村井正（水前寺）	熊本県文化課	九州旅客鉄道（株）
岡崎全修（錢塘）	熊本県警察	九州旅客鉄道（株）
弥富孝一（沼山津）	建設省熊本工事事務所	九州旅客鉄道（株）
森下功（花園）	河川管理課	九州旅客鉄道（株）
四宮至（世安）	大分県立図書館	九州旅客鉄道（株）
山口登志夫（壱川）	大分県立宇佐風土記の丘	九州旅客鉄道（株）
鳥井行義（八反田）	歴史民俗資料館	九州旅客鉄道（株）
圭室文雄（東京都）	熊本大学国史学研究室、	九州旅客鉄道（株）
黒髪小学校	産業文化会館	九州旅客鉄道（株）
田迎小学校	熊本市民病院	九州旅客鉄道（株）
第一高校清音会	市文化課	九州旅客鉄道（株）

「市史編さんだより」第十六号をお届けします。  
本誌は、市史編纂事業の進捗状況を市民の皆様にお知らせするとともに編纂過程における興味深い内容について専門員の先生方の論考を掲載しています。

今回は、明治時代に熊本監獄から北海道に移送された囚人たちのその後について、大江六丁目にあつた伝染病院が市民病院に統合された経緯、加藤清正使用の印判について各時代の専門員の先生方に執筆いただきました。また、川尻町の吉村圭四郎さんには「戦前の熊本の歌あれこれ」と題して御研究の一端を御投稿いただきました。

これからもいろいろな話題を調査トピックとして紹介してまいりたいと思いますが、「新熊本市史」を手がかりに他方面からの論考をお寄せいただくよう期待しております。

今後も市民の皆様に親しんでいただける広報誌として、育てていきたいと思います。御意見・御感想をお待ちしております。

終わりに成りましたが、御執筆いただいた先生方には公私ともに御多忙の中、調査研究の成果をお寄せいただき感謝いたします。（事務局）

史料の提供にご協力を

皆さんの身近に「史料」がありましたら、  
ご提供をお願いします。

熊本市市史編纂課  
〒860-808 熊本市

860  
-0808  
熊本市手取本町一  
096・328・2038